九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ギュンター・グラスの『局部麻酔をかけられて』：ダンツィヒから1967年の西ベルリンへ

大羽，武

https://doi.org/10.15017/2332638

出版情報：文學研究. 82, pp.29-51, 1985-03-30. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

ギュンター・グラスの
『局部麻酔をかけられて』

——ダンツィヒから1967年の西ベルリンへ——

大　羽　　武

ダンツィヒ三部作『ブリキの太鼓』(1959)，『猫と鼠』(1961)，『犬の年』(1963) に共通して登場するアナキスティクな少年シュテルテベーカーは第二次大戦中に逮捕され，前線送りになっていたが，生き延びて『局部麻酔をかけられて』(*örtlich betäubt*, 1969) ではシュタールッシュという名前で西ベルリンに再登場する。すでに40歳に達し，教職に就いている彼は，皮肉なことに今度は立場を変えて，教え子シェールバウムのアナーキックな計画に対処していかなくてはならない。彼は思想的には多くの点でシェールバウムに共感を覚える。が，教師としての彼は生徒の身の安全と将来を危惧し，シェールバウムに計画を断念するよう説得し続けるのである。本論は登場人物の思想を分析し，1960年代後半の西ドイツ社会とギュンター・グラス，及び『局部麻酔をかけられて』とダンツィヒ三部作との関係を考究するものである。

1. 時代背景
2. 作品構成
3. 登場人物
   - ○エーバーハルト・シュタールッシュとフィリップ・シェールバウム
   - ○イルムガルト・ザイフェルトとヴェロ・レーヴァント
   - ○歯科医
   - ○その他の人物たち

4. 受容について（補足として）
5. 結び

1. 時代背景

『局部麻酔をかけられて』は *Verlorene Schlachten* というタイトルで1966年に起稿された[1]。ハンスペーター・ブローデによれば，グラスはまず第一に彼と同年齢（つまり，1927年生れ）の教師の過去をもっと強調し，おそらくダンツィヒ三部作を四部作に完成するつもりであったらしい[2]。このブローデの言を咀嚼すれば，1924年から1954年迄の30年間を描写した『ブリキの太鼓』や1917年から1957年迄の40年間を時代背景とする『犬の年』が戦後の西ドイツを，戦前，戦中の狂気の社会を結果的には産み出し支えた大衆の未熟な精神構造の延長として捉えていたのと同様に，『局部麻酔をかけられて』においても40歳の教師の戦後22年間の，大戦以前から連綿と続く小市民の非政治性，非社会性を，即ち政治，社会に対し感覚が麻痺している小市民を叙述することであったと思われる。もう一度「即ち」を使えば，過去が止むことなく持続していること，そのことを第二次大戦を原体験とする教師の視点から活写することであったと思われる。このような意味において，以前のシュテルテベーカーが語り手として再登場する *Verlorene Schlachten* はダンツィヒ三部作を四部作に拡大することになるのである。

ところが，この当初の構想は変更を余儀無くされる。作者グラスにとって看過し得ない問題が生じたのである。それは，シェールバウムの計画や毛沢東主義に心酔するヴェロが代表するところの，若者のアナーキックな急進化という問題である。そこで1967年前後の西ドイツにおける学生を中心とした議会外反対運動を一瞥しておきたい。

60年代の初頭以来の硬直化した大学監理に反対する学生の抵抗，ドイツ社会民主党のゴーデスベルク綱領後の議会外反対勢力の結成及び彼らの，第三世界の解放運動に対する共感の表明。重要な個々の事件としては，1967年6月イラ

ン国王訪問反対デモと大学生ベンノ・オーネゾルゲ射殺事件に対する抗議運動とその射殺者追求。同年9月フランクフルトのアメリカ領事館におけるヴェトナム討論集会に対する組織化。1968年2月西ベルリンにおけるシュプリンガー・コンツェルン及び西ベルリン市庁に対するデモ。同年4月ＳＤＳ（社会主義ドイツ学生同盟）の指導者ルーディ・ドゥチュケ狙撃事件及びこの陰謀に対する，イースターの暴動と呼ばれた抗議デモ。大学の教室占拠，家屋占拠，百貨店の炎上，商店街，公共建築物の破壊――新左翼の一部はテロルとアナーキズムに傾斜していく[3]。このようにエスカレートしていくアナーキックな議会外反対運動は，議会制民主主義の漸進的発展を願い，その推進力としてドイツ社会民主党を強力に支援してきたグラスの政治思想とは相容れない性格をもつ。さらに，左翼の議会外反対運動が急進化すればする程，右翼のそれも急進化するのは理の当然で，社会は荒立ちいっそう混迷化する。そんな左右の急進主義者にグラスは次のように語りかける。「君たち，狭量の急進主義者たちよ，君たちにとって，改革の進み方は余りにも遅く矛盾に満ちています。君たちは，ずっと以前に起り自滅してしまった革命を弁護しますが，散々嘲笑された改良主義者（Reformist）たちは，左と右からの革命を生き延びる限り，根気よくここでほんの少し改良し，あそこで震えながら絶えず正義を弁護し，その政綱を変化する時代に適応させます，即ち協調に束縛されながら，果てしなくゆっくりと仕事を進め，社会民主主義者を名乗っているのです。」[4] すでにこの頃，グラスは左翼の急進主義者に改良主義者と嘲笑され，彼らの信頼を失い始めていた。が，敢えて上記のような発言をしたのは，彼が，急進主義者に熟考を促すこと，と同時に彼と同じような改良主義の若者を非理性主義の侵入から保護することの2点を焦眉の急と考えたからであろう。グラスが1960年代後半の若者の急進化を憂慮することによって，当初の構想を変更し，1967年[5]という，まさに執筆中の過激な時代を物語の中心に据え，アナキスティクな若者を取り扱ったのである。

2. 作品構成

作品は三部から成り，一人称の語り手シュタールッシュは第一部では下顎の治療を，第三部では上顎の治療を受けていて，その間の2週間の治療休みが第二部を構成している。シュタールッシュは回顧しつつ，およそ2年間の出来事を物語るのであるが，その殆どは1967年の初頭に属することである。過去を語るという点はダンツィヒ三部作と同様だが，ダンツィヒ三部作の語り手には，それぞれ物語る必然的な動機があったのに対し，シュタールッシュにはそれが欠如している。それは，シュタールッシュにはダンツィヒ三部作成立の原動力となった語り手の罪の意識がない，ということに起因しよう。彼は「自分独自の過去を振り返り，解釈し，そして過去を自分の現在と調和させようと試みる」[6]のである。

「これを私は歯科医に語った。口を開けられ，テレビの画面と向かい合って，テレビは私と同様に無言のまま，コマーシャルを喋っていた，ヘアスプレー，ヴューステンロート，白よりも白い……ああ冷凍冷蔵庫の中には，子牛の腎臓と牛乳の間に私の婚約者が横になっていて，言葉の泡をぶくぶく立てた……」[7] これが小説の書き出しである。この冒頭の記述には物語の本質的な要素が含まれているとし，フォルカー・ノイハウスは『局部麻酔をかけられて』の内容を次の4つの領域に分類する。[8] (1)歯の治療中の実際の状況。(2)歯科医との虚構された談話。(3)治療椅子の向かい側に備え付けられたテレビに映る出来事。(4)シュタールッシュがテレビのスクリーンの上で可視的にするところの空想上の出来事。続けてフォルカー・ノイハウスは，(1)と(2)の境界は曖昧なままであり，事実である(1)と(3)は空想された(2)と(4)との区別が殆ど不可能であると付言する。ともあれ，物語では5m×7m×3.3m(高さ)の治療室の，患者を治療から精神的に紛らす一台のテレビが重要な役割を演じるのである。フォルカー・ノイハウスが指摘するように，明確に区分し難い事実と空想が，それも過去の事実と現在(1967年)の事実，過去に関する空想と現在に関する空想とが，テレビスクリーンの上に自由自在に，恰もモザイク模様風に映し出される。それだけにこの小説は難解で，「複雑なテーマのいろんな織物を同時

に完成することを可能にする為，そのつど前進したり，後退したりして話の繋がりを概観しなければならない極めて注意深い読者を要求する」[9] のである。

第一部

主題呈示部である。テレビスクリーンに現れる主なものを列挙してみると次のようになる。(1)学校における生徒の喫煙コーナー設置要求。(2)第二次大戦中の想い出（乳歯を無くしたこと，母の死，少年ギャング団の頭領だったこと等)。(3) ヴェトナム 戦争に関する シェールバウムとの会話。(4) 婚約解消。(5)大気汚染。(6)技術者としてセメント会社に入社した経緯及び電気炉粉塵除去機の発明と設置。(7)キージンガー首相。(8)セメント会社の社長で，戦後ソ連に抑留されていたクリングスの帰還と砂箱を 利用した戦争ごっこ。(9) 同僚の女教師イルムガルト・ザイフェルトの第二次大戦中の想い出。(10)婚約者リンデの射殺ないしは絞殺。(11)リンデが司会する，シェールバウムとヴェロ対クリングスのクイズ番組。(12)ブルドーザーによる過剰な消費社会の大掃除。ざっと以上のことが画面に登場し，その間に歯科医との会話があり，実際の歯の治療がある。その中でひと際注意を惹くのが，画面を横切りながら，シェールバウムが言う次の言葉である。「歯痛に悩む先生。 メコンデルタで何が 起っていますか？　お読みになりましたか？」[10] 彼はシュタールッシュの「君に生徒新聞を引き受けてもらいたい。君の批判的な才能は道具を欲しがっている」[11] という勧めを断り，別の計画があるのだが，それはまだ凍結中であると言って明かさない。「いつの日か溶かされ，最後まで考え抜かれ，行動に 移される為には，まだ完成していない思想や計画を凍結させねばなりません。」[12]

このように呈示部では一体何が問題になるのか，具体的に明らかにされず，仄めかしのまま終る。しかしながら，嘗てのシュテルテベーカーであり，今日国語と歴史の教師であるシュタールッシュの人物像はかなり明瞭な輪郭をもって見えてくる。詳細は次節に譲るとして，シュタールッシュの意識形成にとって過去，殊に第二次大戦中の体験は絶対的で，現代の状況に対する彼の姿勢を

決定している。その現代の主な状況を抽出すると，(1) 凍結中のシェールバウムの計画，(2)銀の舌と渾名されるキージンガー首相，(3)クリングスの砂箱を利用した戦争ごっこ，(4)ブルドーザーによる過剰な消費社会の大掃除，ということになろう。(1)〜(3) は事実として，(4) は空想として現れるのである。

第二部

主題展開部である。シェールバウムはシュタールッシュに凍結していた計画を打ち明ける。西ベルリンの中心クーダムの高級ホテルの前で，お客の多い午後，シェールバウムの愛犬を焼殺するというアナーキックな計画である。

「犬はそう簡単に焼けないぜ」

「たっぷりガソリンをかけときます」

「しかし，動物をね。なにしろ生き物なんだ」

「ガソリンはこれからでも手に入ります。新聞やテレビを呼んでおいて，プラカードに，これはガソリンでナパームではない，と書きます——彼らに見せてやるんだ。マックスは火がついたら駆け出すでしょう。ケーキの載ったテーブル目がけてね。ひょっとしたら飛火するかもしれない。そうなれば，彼らにも理解されるでしょう……」

「何を理解させたいんだ？」

「焼け死ぬってどういうことかです」[13)]

この計画は，ヴェトナム戦争でアメリカ軍が強力な殺人兵器ナパーム弾（投下すれば，発火，爆発を起し2000〜2500平方メートルが800度以上の火の海と化し，高熱と激しい燃焼による酸素欠乏で，まわり一帯を焼き尽し，人間を窒息させてしまう）を使用していることに抗議するものだが，その矛先は直接アメリカに向けられているのではない。彼の意図は，この非人道的な残虐行為を遠く離れたアジアでの，自分達とは無縁な出来事として，戦後の経済的繁栄に酩酊している西ベルリン市民，ひいては西ドイツ国民を啓蒙することにある。な

るほどヴェトナムでのアメリカ軍の行為は，人間として許し難く，少年の心を痛く傷つけるには違いないが，彼にとってより重大なことは，自国民の政治的無関心，つまりグラスがダンツィヒ三部作で執拗に諷刺したところの，政治的社会的に未熟で，自己の欲望の充足のみに奔走する人々である。この点において彼のアナーキックな計画は，ドイツ国内の問題であるキージンガー首相の問題，クリングスの幼稚な戦争ごっこ，及びシュタールッシュの，例のブルドーザーによる過剰な消費社会の一掃と結びつく。即ちキージンガー首相の問題は，嘗てナチスの党員であった者が，今また許されてついに首相の座に就いたということである。グラスはこの問題を国民の精神の問題に還元し，国民の思慮不足，政治的未熟さの反映として捉える。そういった人々を代表するのが，戦後になっても相変らず砂箱で復讐戦遊びをするクリングスである。それは，ナチスの台頭を許し，それを支えた当時の大衆の政治的無関心さが，結局は逆に極めて重要な政治的役割を演じたというパラドックスな状況と，奇跡の経済復興を為し遂げた現代ドイツの状況とが極めて類似している，換言すれば，戦前，戦中の人々の政治的未成熟性は現代まで連綿と継続しているということを示唆しているのだ。それ故，シュタールッシュは人々の理性を麻痺させる現代の豊かな社会をブルドーザーで一掃し，再び零点からの出発を空想するのである。次の表現はその人々の未成熟性をよく表している。「犬気違いのベルリンのような町で，ダックスフントが燃えながらきゃんきゃん鳴いて走りまわるなんてことは，まだあったためしがありません。犬が焼かれる場合しか，彼らはわからないでしょう，地球の裏側でアメ公が人間を焼き殺していることを，しかも毎日ですよ。」[14]「私にとってシェールバウムが問題なのは，彼が一人の人間だからである。だが，ベルリン人にとって犬が問題なのは犬が人間でないからである。」[15]

シェールバウムの計画を巡って物語は急展開する。歯の治療が小説の外面構造を形成しているとすれば，彼の計画は小説の内面構造を形成しているのである。計画を告白されたシュタールッシュは自己矛盾に陥る。が，結局彼は生徒

の身の安全と将来を憂え，計画を断念するようシェールバウムを説得する。彼は自らの体験を語り，計画が実行された場合の悪しき結果について語り，実行現場の下見にまで一緒に行き，説得に説得を重ねる。イルムガルト・ザイフェルトは第三帝国時代の罪の意識故に，計画を支持し，シェールバウムの志気を鼓舞する。シェールバウムの同級生であり，急進主義者であるヴェロ・レーヴァントも計画を熱狂的に支持し，シュタールッシュのシェールバウムに対する説得を批難し，教師の影響力からシェールバウム（つまり，計画）を擁護しようと努める。しかし，その効果がないと彼女は自分の肉体を投げ出し，節義にもとる行為で，シュタールッシュの説得を阻止しようとする。歯科医はシュタールッシュから逐次受ける報告を冷静に分析し，相対化し，助言を与える。シェールバウムがこれらの人々に囲まれ，説得されたり，激励されたりしているうちに時が経ち，彼の実行への意志は鈍化し，ついには計画を断念し生徒新聞の編集長を引き受けることになる。それは，結果としてシュタールッシュの説得が効を奏したことになるが，別にシェールバウムが彼を心服できる教師とみなした訳ではない。それどころかシェールバウムは，40歳になっても17歳の時の話を吹聴するシュタールッシュのような人間にはなりたくないのである。彼が範例として惹かれたのは，第二次大戦中ナチスに実践的な方法で徹底抗戦したヘルムート・ヒューベナーである。同時に彼の翻意は，ザイフェルトが彼を身代り殉難者とみなしていたこと，及びヴェロもその一員である左翼の急進主義者たちとの精神的ギャップ，つまり「犬を犠牲にするという彼の計画が，彼の動機を知らず，ただ騒動を誘発する政治的ハプニングを引き起してもらいたいばかりの，革命の説教者たちの宣伝活動に陥ってしまっている」[16] ことを理解したことからくる意気阻喪の結果でもある。

第三部

呈示部の再現ではなく，事態は呈示部よりさらに悪化する。この点において，同じ三部形式ではあるが，呈示部が再現部で反覆される古典ソナタ形式とは異なる。シェールバウムは，学校新聞という狭い枠内に限定されたことでは

あるが，生徒の意識改革をめざして実践的な歩みを開始する。しかしながら，彼が書いた記事は他の編集委員の反対にあって削除され，改革は思うようには捗らない。シュタールッシュは温水プールで造波機械を乱暴に操作し，彼の心の傷とは無縁な人々，ヴェトナム戦争のことも，キージンガー首相のことも意に介さず，声なき声としてそれらを支えている，豊かで満ち足りた人々を混乱に陥れる。彼の抑圧された大掃除への意志の発現である。クリングスは相変らず幼稚なままであり続ける。ザイフェルトは身代り殉難者を失い，依然として過去の罪の意識に苛まれ続ける。ヴェロは益々急進化するが，2年後あっさり結婚する（カナダの言語学者との結婚は過激な舞台からの引退を示唆している）。「そして私は左下に病巣ができた。(中略) 何も長くは続かない。いつも新しい苦痛がある。」[17] 小説はこの言葉で締め括られる。左翼の過激な運動は一過性で，永続的な力となり得ず，実践的地道なシェールバウムの改革も遅々として進捗せず，人々は相変らず過剰な消費社会に精神を麻痺させられたままである。

3. 登場人物

「シュタールッシュのまわりの4人，つまり5人の人物が小説全体を通じて行動し，グラスが若者の暴動と老人の硬直性という悪しき社会問題に対する実際的な関係を可視的にしたいと思っているところの踊りを踊るのである。」[18]
5人が主要な登場人物であるが，歯科医を除く4人は，いくつかの点で対照的な人物である。シュタールッシュとザイフェルトは，作者グラスと同じく1927年生れの40歳で，シェールバウムとヴェロは共に17歳である。40歳と17歳という年齢は，第二次大戦を己の精神形成の原体験とする世代と，大戦を歴史としてのみ追体験しうる純粋無垢な世代を意味する。そのうえ，教師とその生徒という立場も対照的である。この二つの世代のいずれに焦点を当てるかで，小説は二通りに理解されうる。ハンスペーター・ブローデによれば次のようになる。シュタールッシュとザイフェルトの立場に立てば，ナチスの歴史の排除から出発しながら，まったく別の方向へ向いた政治力学をもつ現代の社会状況に，ナ

チス時代に傷つけられ，今や孤立し苦しみながら対立している登場人物の順応の危機及びアイデンティティの危機と理解され，シェールバウムとヴェロの立場に立てば，1967年初頭の政治的社会的状況の瞬間写真と理解されるであろう[19]。また同世代の人物にも対立点がある。シェールバウムの計画に反対するシュタールッシュと支持するザイフェルト，計画を過激派の宣伝活動とみなすヴェロと純粋な動機から計画したシェールバウム。シュタールッシュはザイフェルトを，シェールバウムはヴェロを共に一度平手で殴る。

エーバーハルト・シュタールッシュとフィリップ・シェールバウム

両親を失い，子供らしい夢や希望を抱くことさえできなかった第二次大戦中の体験が，再び当時のような狂気の時代を現出させてはならないという，死者と未来の人々に対する使命感を，偶然にも大戦を生き延びた者にもたらすのは，しごく尤もなことである。シュタールッシュにもその使命感が認められる。大戦中塵払い団（Stäuberband）の頭領として体制に非政治的に反抗したシュテルテベーカーが，戦後シュタールッシュという名前で，鉄鋼と共にドイツ復興の基幹産業であるセメント工場の技術者として塵埃除去で成果を挙げ，環境保護と企業の収益に貢献していくのは，元塵払い人の戦後社会への順応過程としてごく自然な印象を与えはするが，結局彼は技術者に徹することができず，国語と歴史の教師になり，現代を歴史的な広がりの中で客観的に理解し，過剰な消費社会を一掃したい願望に囚われる。

シェールバウムは，シュタールッシュの零点の体験がない故に，同じくヴェトナム戦争やキージンガー首相を声なき声として支える人々を問題にしても，純粋且つ過激である。シュタールッシュはシェールバウムの軽挙妄動的計画に対し次のように言う。「いずれにせよヴェトナムは，間違った政治の結果であるか，腐敗した社会制度の必然的現出なんだ。彼はその理由を尋ねない，彼は人間が焼けるのを見て，それに反対する何かをやろうとする，とにかく何かをやろうというのだ。」[20] が，シェールバウムがその理由を尋ねないのは，彼が問

題にしているのは究極的にはヴェトナムではなく，西ドイツ国内のことだからである。それにしても，シュタールッシュがそう思うならば，自らその理由をシェールバウムに説明してやってもよさそうなものだが，彼はそうしない。何となれば，彼の問題も西ドイツ国内のことだからである。

彼は只管，体験を通して獲得した歴史的認識によってのみシェールバウムを説得する。「シュタールッシュの論拠は具体的な，生きてきた体験であるところの歴史でしかない」[21] のである。シェールバウムの側から見れば，シュタールッシュは事態を解釈したり，結果を推定したりするばかりで少しも行動しない，過去の体験（シュタールッシュにはナチス時代に少年ギャング団の頭領として体制に反抗したという自負もあるが，シェールバウムには何の共感も与えない）にしがみついた教師でしかない。シェールバウムは認識するばかりで行動しないシュタールッシュを批難し，彼は認識に行動が結びついたヘルムート・ヒューベナーの道を選択する。この二人，シュタールッシュとシェールバウムの間には，経験は伝達されうるか，という問に代表される世代間の断絶が存在しよう。しかしながら，「この教師は自分の権威を振りかざす独裁者ではなく，自分の生徒のことを心配する助言者である」[22] というように，シュタールッシュとシェールバウムの師弟関係は肯定的に表現されているのである。

イルムガルト・ザイフェルトとヴェロ・レーヴァント

世代の典型的な心の傷を代表するのがザイフェルトである。つまり彼女はシュタールッシュと同じく第二次大戦を原体験とするが，彼が体制に非政治的に反逆したのに対し，彼女はドイツ女子青年団の小管区長として徹底的に体制に協力し，密告という卑劣な行為まで犯したのである。この時の傷痕は時間の推移と共に治癒されるどころか，罪の意識になり，彼女は絶えず警察に怯え続け，神経症的に苦悩する。この罪の意識が彼女を，過去とは逆に，熱烈な反体制知識人に仕立てあげたのである。それ故，彼女はシェールバウムの計画に多大な期待をかけ，彼の志気を鼓舞する。「この新しい罪のない世代こそ——私

の言うことを信じて下さい，エーバーハルト，積年の幻影に終止符を打ってくれるでしょう。」[23] 要するに過激な左翼思想の持主ではあるが，行動力のない彼女は，シェールバウムに自分の身代り殉難者になってもらいたいのだ。「17歳の時彼女がやらなかったことを，彼にやってもらいたいのだ。」[24]「何故なら，彼女は彼の範例によって力を得ることができ，彼女自身のナチスの過去を終らせることができると信じるからである。」[25] 無論，彼女の期待はシェールバウムの純粋な動機とは無関係で，彼女が情熱的になればなる程，彼の心はそれだけいっそう彼女から離反していく。その結果，彼女の罪の意識は相変らず払拭されずに，彼女を悩まし続けることになる。

毛沢東思想に心酔し，部屋にはチエ・ゲバラの写真を飾っているヴェロは，ザイフェルトの社会主義的な弁舌に大きな影響を受けている。彼女は当時の典型的な，若き急進主義者を体現させられているのだ。「『勝利を獲得するには，断固として決意し，いかなる犠牲をも恐れず，あらゆる困難を克服すること』——これです。」[26] 急進的左翼の彼女は，その言葉通り，シェールバウムの計画を革命への宣伝活動とみなし，友人シェールバウムが犠牲になるのを厭わない，またある時には自分を犠牲にして（シュタールッシュの前に身体を投げ出して誘惑を試みる）シュタールッシュのシェールバウムへの影響力を排除しようとする。シェールバウムが計画を断念すると，彼女は彼を「操られた妥協主義者」[27] と呼び，自ら過激派の先頭に立つ。が，2年後彼女は結婚し，普通の女として体制に順応してしまう。

以上のように，克服されない過去をもつザイフェルトと無思慮に議会外反対運動に熱狂するヴェロとは，極めて類似した関係にある。ヴェロは17歳当時のザイフェルトの再来とみなすことも可能である。何となれば，右と左という立場の相違はあれ，共に17歳において無思慮で，熱狂的で，時流に流され（ザイフェルトはナチスに，ヴェロは若者の過激な反乱に），罪を犯す（正確にはヴェロは犯しかかった）からである。グラスは，ザイフェルトとヴェロ，及びシェールバウムのアナーキックな計画の挫折において，「左右の両急進主義は中道

の革新路線を同じように拒絶することによって崩壊するという，彼の普段の代表的な見解を証明しているのであり」[28]，現実に対して無力さを露呈した二人の過激派よりも，妥協しつつも積極的であり続け，ヘルムート・ヒューベナーの道を進むシェールバウムの中に真の政治的力を認めているのである。

歯科医

シュタールッシュの話し相手であり，助言者である。「根本において私たちは同意見です。殊に私たちは二人共ヒューマニズム，人間性に対して義務を負っているのを感じるのですから……」[29] というシュタールッシュの言葉通り，彼と歯科医との思想基盤は同一である。が，歯科医はシュタールッシュ以上に理性的で慎重で保守的である。それ故に彼はシュタールッシュの，ブルドーザーによる社会の大掃除という空想すらも否定する徹底した非暴力主義者である。シュタールッシュは進歩という概念にやや懐疑的であるが，歯科医はそれをまったく信じ切っている。この点において彼は，「一歩一歩発展する為，急激な飛躍をグラスと共に拒否している」[30] のである。

「（どうか左の方の位置を定めていただきたい，私が歯科医より左に立っているとすれば――（中略）――シェールバウムは私より左に立っている，だが最近，彼がまだ行動しないとすれば，イルムガルト・ザイフェルトより右だ，しかし彼女はヴェロ・レーヴァントより左ではなく，一体どこに立っているのだろう？）」[31] このシュタールッシュの独白は5人の思想関係を的確に表している。即ち思想的に5人を左から右へ並べてみると，ヴェロ，ザイフェルト，シェールバウム，シュタールッシュ，歯科医の順になる。ザイフェルトはなる程過激な思想の持主ではあるが，その思想はヴェロのような純粋なものではなく，極言すれば，過去の罪からの救済のみを志向する，まったく個人的なものであるから，思想の社会的位置が固定され難いのである。絶えずセネカの文を引用する歯科医は，「抽象的な原理のままであり続け，独自の生と実際の過去とをもつ具体的な人物になっていないのである。」[32] それどころか，彼には終

始名前がない。実は，シュタールッシュと歯科医は一人の人物に宿る二つの心，つまりシュタールッシュの心中を代表しているのではないか？　そう思われる。それ故，歯科医は抽象的で，名前もなく，独自の生と過去をもっていないのであろう。

シェールバウムは計画を断念した後，歯の治療を受け，歯科医に決定的に挫折させられる。歯科医は何でも相対化し，方向づけ，予防できると信じている。しかし，次の観賞魚の比喩はシュタールッシュ・歯科医と社会との関係を暗示していよう。「入念な餌付け，適度な水温，豊富な酸素，寄生虫の予防薬——それでも今日は琉金が，明日はかさごが腹を上にして浮んでいる。グッピーは自分の稚魚を食べる。」[33] 彼ら二人は理性によって，あらゆる悪を予防する，がしかし，悪は一向に根絶され得ないのである。

その他の人物たち

対照的な人物を対比させることにより，双方の本質をよりいっそう際立たせるものとして，次の二組がある。

ヴォルフガンク・ボルヒェルトの『戸口の外で』の主人公ベックマンと元陸軍元帥クリングスとの対比。後者のネクタイまでつけた，当時としては派手な帰還風景は，前者の名前を併記することにより，読者に，負傷し空腹で，そのうえ一切を失った悲惨なベックマンの帰還風景を想起させ，クリングスの人間としてのいかがわしさを印象づける。事実，クリングスはセメント会社の経営者として，戦後西ドイツ経済復興の立役者の一人でもあるが，その内面は「状況が要求するものを自ら欲するような心的態度がとれるように我々を教育しよう」[34] という，ナチスに追従し，共に走り出した状況共同構成者的性格である。第三部では，砂箱での戦争ごっこに敗れた彼は政界に出ようなどと言いだす始末である。ここまでくればクリングスが，次に述べるキージンガー首相の性格を請け負っているのは明確である。

第二次大戦中，レジスタンスの闘士として処刑されたヘルムート・ヒューベ

ナーと元ナチスの党員であったキージンガー首相とを対比することによって，キージンガー首相の人間性を批判する。第三帝国時代にはナチスの党員として活動し，ナチスの過去を清算することから開始された戦後社会に，最高の権力者として再登場したキージンガーは，状況が要求するところのものを自ら欲するような魂の態度がとれるよう，自らを最高度に教育し得た人物であろう。彼の再登場を支えているのは，ケンピンスキーのテラスでケーキをぱくつく人々が代表する精神なき人々，つまり豊かな社会で己の生を心行くまで充足することに没頭する結果，精神が麻痺し状況を正確に認識し得ない人々である。こういった精神なき人々は，この生に満足し，この生をまったく幸福と感じ，このような生が限りなく続くことを望む人々である。

4. 受容について（補足として）

この節では，如上の考察の補足として，受容美学を推奨するマンフレット・ドゥルツァクの論文 *Plädoyer für eine Rezeptionsästhetik*[35] を紹介し，必要に応じて受容に関する他の論文にも言及したい。したがって，本節の基調はドゥルツァクの論文であることを予めお断りしておく。彼の論文は，同じ作品が政治・社会・文化の伝統が異なれば，何故こうまで違った風に受容されるのか，という興味深いものである。

ドゥルツァクはまず同じ芸術作品が，政治的社会的及び文化的伝統の違いから，国によって受容のされ方が異なると前置きし，その実例としてルキノ・ヴィスコンティによる，トーマス・マンの『ヴェニスに死す』の映画化を挙げる。ヨーロッパ，殊にドイツでは賞讃され，映画「ヴェニスに死す」は普通の文学作品の映画化よりも優れていると高く評価されたのであるが，アメリカ合衆国（以下アメリカと略記する）においては，逆に，この映画は平均的なものより出来が悪く，堕落し，歪曲化されていると酷評されたのである。続けてドゥルツァクはもっと驚くべき実例として，今度は映画「ヴェニスに死す」とは両国における評価は逆転するのだが，西ドイツと *Local Anaesthetic* というタ

イトルで1970年に英訳出版された，アメリカにおける『局部麻酔をかけられて』を取り上げる。

ドゥルツァクは『局部麻酔をかけられて』を専ら否定的に受け取った西ドイツの批評家の中からホルスト・クリューガー，ライヒ＝ラニッキー，ヘルムート・カラーゼックの3人を選び出し，何故彼らの批評が『局部麻酔をかけられて』に否定的であるのか，次のように説明する。第一に，現代の真面目な政治問題が『局部麻酔をかけられて』では滑稽味を帯びた反乱として描写されていて，常に若者の抵抗運動，新左翼ないしは議会外反対勢力として特徴づけられるところの現代の政治現象に対決させようとするグラスの一切の試みは，例外なく愚かであるばかりか，危険でさえあるのだ，とこのように彼らは，若い世代の政治的急進化，議会外反対勢力，西ベルリンを出発点とする学生騒動といった，当時の外的な政治状況を持ち込んで作品の政治的内容を批判しているからである。第二に，彼らが『局部麻酔をかけられて』をグラスの力の衰退，自信の喪失とみなすのは，彼らが『ブリキの太鼓』や『犬の年』等によってすでに出来上がってしまった，終始変らぬグラスのイメージに囚われ過ぎているからである。このようにドゥルツァクは述べている。ハンスペーター・ブローデはクリューガーの『局部麻酔をかけられて』に対する姿勢をもう少し明確に述べている。「ホルスト・クリューガーは，当時のベルリンそして今日ドイツで抵抗運動の標を帯びて行われているものに対する範例であるこの物語に，彼にとっては腹立たしい小児退行現象の性質があることを確認したのである。この小説の中では重大な，しかも根元まで入り込んだ政治的素材が，牧歌風に個別化され，無害にされ，単なる世代間の争いにまで制限されているのだ。こういうクリューガーの異議申し立ての背後には，当時は日常的で，後になってむしろ再度疑問視されることになった政治的日常闘争の反映及び道具としての文学の概念が存在するのである。」[36] つまり『局部麻酔をかけられて』が酷評される最大の理由は，グラスの，同時代の政治的素材の取り扱い方，加工の仕方に問題がある，というものである。しかしながら，同時に「これらすべての否定的な受

容は，一致して若者の国際的な反抗を肯定し，この関係で1968年以来，調停的実際的な態度によって左翼運動の共感を失い始めたグラスを，その政治的構想と共に却下するところの批評家たちの意識状態を反映している」[37] のである。また，H.L.アルノルトは，*Spiegel* に掲載された「文学批評はただ単に文学的影響以上のものを，即ち政治的影響を読者に与えるのであるから，『局部麻酔をかけられて』に対する批判が行われるのである」という記事に対し，「私はこの種の恐れは余計なものであると思う。批評家は文学作品の叙述に参与する読者を過大評価しているのである」[38] と反論する。しかし，彼も形式面において，ダンツィヒ三部作のグラスのイメージに左右されたか否かは定かではないが，『局部麻酔をかけられて』を駄作とみなす。

アメリカでは，西ドイツでの受容とは正反対に，大方の批評はこのグラスの最新作を賞讃でもって迎えた。*Local Anaesthetic* はベストセラーを続け，雑誌 *Time* は1945年以来初めて一人のドイツ人作家に，「42歳のグラスはあらゆる点で世界或いはドイツの現存する最も偉大な小説家であり得るのに，彼はひと目見ただけではそうは見えない」という驚嘆すべき Titelgeschichte を捧げたのである。これ程アメリカで高く評価された理由は，「生のアレゴリーとしての歯医者の椅子」，「世代間の小説家，若者に向かって話しかけることが可能な一人の男性」，「『局部麻酔をかけられて』は適切な疑問を適切な時期に提出するところの，グラスの豊かな才能の一つである」，という雑誌の見出しが象徴するように，この小説がアメリカ国内の政治状況とアクチュアルな関係をもつことができたからである。即ち『局部麻酔をかけられて』が獲得したアメリカにおけるアクチュアリティは，グラスが現実のアメリカの状況の中に再確認される政治問題を作品の終りまで一貫して描いている，ということに起因するのである。

ダックスフントを焼殺することによって，ヴェトナムにおけるナパーム弾の残酷さに対して人々の注意を喚起するという計画が，西ドイツで革命的な身

振りを示しながら政治問題を小奇麗に描写したと批難されていた時，アメリカではまさにこの暗号のような単純化は肯定的に捉えられていたのである。何故なら，アメリカでは左翼学生によるウィスコンシン州立大学のコンピューターセンターの爆破事件や，その他恐ろしい事件が発生していたからである。さらにアメリカの中産階級が殆どもう答えることができない疑問に対し，グラスが答えようとしていること，つまりグラスが，一切のイデオロギーを失い，最後の砦として常識，即ち理性にしがみついているアメリカ中産階級のメガホンになっている，という理由もある。『局部麻酔をかけられて』で勝利を収める常識は，間違ったイデオロギー戦争の非正当性や政府の政治的偽善，大人世代の虚偽の道徳といった，アメリカの国内政治の悲惨な状況を変革し得るであろう，というものである。同じ観点から，シェールバウムの実際的な，和解を快諾する態度は，アメリカの若い世代と年配の世代との不和を止揚し得る範例として理解されるのである。

かてて加えて，『局部麻酔をかけられて』がアメリカでアクチュアリティを獲得し得た背景には，それ迄のグラスの作品が，アメリカ人が間接的にのみ関係していたに過ぎない歴史上の素材を提出するエキゾチックな回顧と受け取られていて，西ドイツにおけるような，グラスの永遠不滅の固定されたイメージが存在しなかったことも，大いに与っていよう。

このように西ドイツ及びアメリカにおける『局部麻酔をかけられて』の批評では，形式に関するものは付随的で，内容の否定ないしは肯定が第一義であった。西ドイツで否定されるところが，アメリカでは高く評価される。それは両国の特殊な国内の政治状況によって予め決定されているのである。

5. 結　び

『局部麻酔をかけられて』は，比喩を使って表現すれば，ギュンター・グラスの議会制民主主義の漸進的発展を願う現実主義的な思想を軸にして，シュタールッシュに過去と現在，事実と空想の境界を自在に往来させながら，若き左

翼の急進主義者から理性万能を信奉する保守主義者に至るまでの5本の糸を縒り合せて出来た政治的色彩の織物である。この織物の裏地は，理性に抗いながら40年来同一の，状況に応じて変幻自在に変色するクリングスが代表するところの精神なき生という素材で出来ているのである。しかしながら，産地西ドイツではアナーキックな現代的色彩が流行中で，この織物はその現代的な流行色が織工の地味な過去の個人趣味の中で窒息していて，その出来映えも織工本来の才能が殆ど認められないという理由から失敗作と酷評される。が，大西洋の彼岸アメリカ合衆国では，本国とは正反対に，この織物の特徴である，急進的な現代が理性と和解した中庸色は中産階級に大歓迎される。

自明のこととして粘り強い政治活動を行う作者グラスと，シュタールッシュ或いは歯科医とを，三者共，理性を信奉しているからといって同一視してはならない。何となれば，シュタールッシュは根本においては行動力が欠如した，だらしない人間であり，一切の悪は予防し得ると信じ切り，些かも不安を覚えない歯科医は実体のない人間でしかないからである。

作中，苦痛（歯痛）として表れる懐疑や不安は，状況を認識する手段なのである。クリングスやホテルのテラスでケーキを食べる人々の生には苦痛がない。認識手段が欠如している所以である。シュタールッシュとシェールバウムは共に，歯列矯正の治療を受け，局部麻酔をかけられる。それは過去による損傷と社会への順応に適した方法なのである。だが，麻酔をかけられた状態が最終的な状態ではなく，再び新たな苦痛が生じる。つまり，「いつも変らない苦痛のうちに，時折具体的に苦痛の原因が変化し，常に新たに克服されるのである。そのことの中に静止しているようで実は進歩しているという僅かの希望の本質がある」[39] のだ。その意味で，ヘルムート・ヒューベナーの道を歩むシェールバウムに真の政治的効力，積極性が認められよう。

［注］

(Text) Günter Grass : örtlich betäubt, Luchterhand Verlag Darmstadt und Neuwied, 5. Auflage, 1982.

1) Vgl., ad lectores 9, Luchterhand Verlag Neuwied/Berlin, September 1969, S. 6.

2) Vgl., Hanspeter Brode : Günter Grass, Verlag C. H. Beck und Verlag edition text+kritik München, 1979. S. 149. (以下 HB と略記する)

3) この部分は次の三つの文献を参照した。
Eva Hösch : Das Lehrer-Schüler-Verhältnis im Brennpunkt gesellschaftspolitischer Auseinandersetzungen, dargestellt an den Romanen ‚Örtlich betäubt' (Bundesrepublik Deutschland : Günter Grass) und ‚Pause für Wanzka' (DDR : Alfred Wellm), in : Der Deutschunterricht, Heft 5, Ernst Klett Verlag Stuttgart, 1976, S. 59. (以下 EH と略記する)
仲井 斌著『西ドイツの社会民主主義』, 岩波新書105, 1979, 73頁。
『世界の大学改革』大学改革研究会編, 亜紀書房, 1969, 171頁。

4) Günter Grass : Rede über das Selbstverständliche, in : Über das Selbstverständliche, Luchterhand Verlag Neuwied und Berlin, 1969, S. 82.

5) 年代は次のようにして決定した。語り手シュタールッシュがグラスと同年生れの40歳であること，及び物語は1月から3月にかけてのことであるということからすれば,1968年初頭が有力な作品の時代背景となる。しかし,第三部でイラン国王がベルリンを訪問するとある。イラン国王の西ドイツ訪問は1967年5月27日～6月4日のことである。それ故後者の史実を根拠に，本論でも作品の時代背景を1967年初頭とし，同じくシュタールッシュの生年月日を1927年初頭とした。

6) EH, S. 65.

7) örtlich betäubt, S. 7.

8) Vgl., Volker Neuhaus : Günter Grass, J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung Stuttgart, 1979, S. 106f. (以下 VN と略記する)

9) HB, S. 163.

10) örtlich betäubt, S. 12.

11) Ibid., S. 11f.

12) Ibid., S. 25.

13) Ibid., S. 93f.

14) Ibid., S. 99.

15) Ibid., S. 122.

16) HB, S. 156.
17) örtlich betäubt, S. 190.
18) Heinz Ludwig Arnold : Zeitroman mit Auslegern : Günter Grass' ,,Örtlich betäubt", in : Grass, A. Francke Verlag Bern, 1973, S. 99.（以下 HLA と略記する）
19) Vgl., HB, S. 162f.
20) örtlich betäubt, S. 143.
21) VN, S. 112.
22) EH, S. 64.
23) örtlich betäubt, S. 96.
24) Ibid., S. 141.
25) EH, S. 60.
26) örtlich betäubt, S. 110.
27) Ibid., S. 173.
28) HB, S. 156.
29) örtlich betäubt, S. 73.
30) VN, S. 112.
31) örtlich betäubt, S. 153.
32) VN, S. 112.
33) örtlich betäubt, S. 98.
34) Ibid., S. 173f.
35) Manfred Durzak : Plädoyer für eine Rezeptionsästhetik——Anmerkungen zur deutschen und amerikanischen Literaturkritik am Beispiel von Günter Grass 》örtlich betäubt《——, in : Akzente, 18. Jahrgang, Carl Hanser Verlag München, 1971, S. 487～504.
36) HB, S. 164.
37) EH, S. 67.
38) HLA, S. 97.
39) VN, S. 117.

„örtlich betäubt“ von Günter Grass
—— Von Danzig nach Westberlin des Jahres 1967 ——

Takeshi OBA

In der Arbeit analysierte ich die Gedanken von fünf wichtigen Figuren und untersuchte, wie Günter Grass' vierter Roman „örtlich betäubt“, dessen Bühne Westberlin im Januar des Jahres 1967 ist, in Beziehung mit der Danziger Trilogie steht. In „örtlich betäubt“ erscheinen der Vietnamkrieg und der Bundeskanzler Kiesinger, der im Dritten Reich ein Nazi war, als die aktuellen konkreten Probleme. Dahinter stehen die nur auf augenblickliche Befriedigung der Bedürfnisse bedachten Bürger, die in der satten Nachkriegsgesellschaft schon den Wahnsinn und den Jammer der Vergangenheit vergessen haben, als die Stütze der Gesellschaft.

Der Schüler Philipp Scherbaum entwirft einen anarchischen Plan, die Bürger das gegenwärtige Unrecht erkennen zu lassen. Seine Lehrer Eberhard Starusch und Irmgart Seifert sind die Vierziger, die durch das Urerlebnis des Zweiten Weltkriegs geformt sind. Starusch lehnt zwar die satte Gesellschaft ab, in der die Vernunft der Bürger anästhesiert ist, aber als Lehrer versucht er eifrig, Scherbaum von seinem Vorhaben abzuraten. Seifert unterstützt es aktiv wegen ihres eigenen Schuldkomplexes im Dritten Reich und muntert ihn dazu auf. Die Freundin Scherbaums Vero Lewand ist junge Radikale und ganz begeistert davon. Der Zahnarzt, der die Rolle des Ratgebers von Starusch spielt, ist vernünftiger als dieser und konservativ. Während Scherbaum von Starusch abgeraten oder er von Seifert und Vero aufgemuntert wird, verzichtet er auf das Vorhaben. Er übernimmt die Chefredaktion der Schülerzeitung und entschließt sich, redlich die Gesellschaft zu reformieren. Seifert und Vero, die Radikalen, haben Scherbaum als Opfer verloren, so daß sie schließlich unfähig zur Sozialrevolution werden.

In der Handlung wird klar, erstens daß Leute, die wie Ferdinand Krings ohne Vernunft sind, satirisch dargestellt sind, zweitens daß die Linksradikalen, die Seifert und Vero repräsentieren, eigentlich keine reale Fähigkeit zur Sozialreform haben und diese nur von einer beständigen Vernunft schneckenhaft ausgeführt werden soll. Das erstere ist das, was G. Grass auch in der Danziger Trilogie hartnäckig zur Frage gestellt hat ; das letztere ist eine Kritik an der Neuen Linken bzw. der außerparlamentarischen Bewegung, wie sie dem von früher her unveränderlichen Gedanken von G. Grass entsprechen. In „örtlich betäubt" wird der politische und soziale Zustand um 1967 von G. Grass aus seinem skeptischen und antiideologischen Denken kritisch geschildert.